普通

第1回

国語

大森学園高等学校　普通科

第1回　2月10日

令和5年度　入学試験問題

国語

注意

1 指示があるまで開いてはいけません。
2 問題用紙にも受験番号を算用数字で記入しなさい。
3 試験時間は**50分**です。
4 問題は一から三までで1ページから17ページにわたって印刷してあります。
5 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
6 解答はＨＢ以上の濃い鉛筆で、はっきりと書きなさい。
7 解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。

受験番号					

一、次の文章を読んで後の問に答えなさい。設問等の都合で省略した箇所がある。

ところで、本というのは、いったい何だろう？

本選びの話をするまえに、この本質的な問いかけをまずしたいと思う。これを明らかにしないと、本の選び方について語ることが難しい。何のために人は本を読むのだろうか？

そんなことは、本の種類によってさまざまだ、と誰もが答えるのにちがいない。しかし、それらも含めて、全体的に抽象化できないものだろうか。

実は、簡単なことである。人は、何故他者と話をするのか、何故他者を見るのか、他者を気にするのか、他者と知合(しりあ)いになるのか、ということの理由と同じなのだ。（ア）

社会には、自分一人が存在するのではない。①沢山(たくさん)の人間がいる。みんながそれぞれ勝手に生きている。本当に大勢がわりと近くにいる。これは、驚くべきことではないだろうか。動物でいうと、水牛の群れみたいなものかもしれない。それが人間の社会である。そして、その社会という群れの中にあって、人は沢山の人に出会う。話をし、議論をし、ときには争いもする。喧嘩(けんか)になるときも珍しくない。その喧嘩をやめさせようとまた別の人が間に入る。

自分の行動は、自覚できる。考えていることもわかる。しかし、他人の行動は、目の前にいなければ見ることができない。考えていることは、顔を見たってわからない。だから、他者に出会ったりしたときに、話をすることになる。言葉でコミュニケーションを取る。なんらかの現象について説明をしたり、教えてもらったり、出来事などについても、それを見た人から様子を聞いたりする。（イ）

A、自分の時間と空間内では経験できないことであっても、他者と出会うことによって、擬似的[a]に体験できる。人を通して知ることができるのだ。これが、群れを成している最大のメリットだといえる。沢山で集まっているほど、この情報収集能力が高まる。誰か一人が気づけば、みんながそれを知ることができるからだ。（ウ）

この言葉によるコミュニケーションが、文字に代わったものが本なのである。

結局、本というのは、人とほぼ同じだといえる。本に出会うことは、人に出会うこととかぎりなく近い。それを読むことで、その人と知合いになれる。先生、友達、あるいは恋人と、本によってどんな「人」なのかという違いはあるけれど、ほぼ「個人」である。そして、多くの場合、それはその本の著者であり、またあるときは本の語り手（主人公）といえる。

②近頃、友達がいない、仲間に入れない、年老いて一人になった、といった「孤独」が問題視されている。そういったものがニュースになる、という意味である。ただ、孤独な人間が増えている、とは僕は認識していない。何故なら、人間の歴史を過去へ向かって眺めれば、そもそも大多数の人間は、ほとんど他者とコミュニケーションを取らなかった。取ったとしても、せいぜい自分の家族、集落の一部の人間だけだったはずだ。今ほど、大勢の人間の言葉が聞け、自分の言葉を聞いてもらえる時代は存在しなかった。そんな情報過多の今だからこそ孤独が問題視されている、という見方もあるかもしれないが、単に無理につながろうとする反動というのか、明るすぎるから蔭がくっきりと目立っているだけとしか捉えられないのである。

それはさておき、本選びは、結局は、人選びであり、つまりは、友達を選ぶ感覚に近いものだと思える。誰か面白そうな奴はいないか、あいつと少し話をしてみよう、といった感覚だ。そして、③そういった場合には、二つの方向性が求められている。

一つは、「未知」である。あいつは、自分の知らないことを知っていそうだ。なにかにやにやして面白そうな表情をしている。きっと、楽しい出来事にソウグウしたのだ。それを教えてもらおう、といった感じで本を選ぶ。この方向性は、若いときには主流だったのではないだろうか。（エ）

もう一つは、「確認」だろう。自分が考えていることに同調してほしい、そういう友達がほしい。［B］、だいたい自分と同じものが好きで、同じ興味を持っている人と知合いになりたい。この傾向は最近では特に顕著で、ネットで検索が楽になったこともあってか、自分と相性がぴったりの人と出会いたい、と大勢が望んでいるようだ。同様に、本についても、自分の意見を後押ししてくれるものを読みたい。本を読んで、「そうだ、そうだ、やっぱり思ったとおりだ。これで良かったのだ」と思いたい。読むことで自身を承認してもらいたい、という心理で本が選ばれるのである。

僕の場合を書いておくと、僕は完全に前者で本を選ぶ。後者で選ぶものは、趣味の雑誌くらいだろう。一般の書籍ではほぼありえない。これは、人間に対しても同じで、僕は、趣味や意見が同じ人と知合いになりたいと思ったことがないのだ。今の奥様（あえて敬称）[注1]も、僕とは性格も趣味もなにもかもまったく一致しない人で、意見なんか悉く異なっている。［C］、そういう違いこそが僕は大事だと考えている。自分にないものを持っている人と知合いになることが、そもそも知合いになる価値なのではないか、と思えるのだ。

④これは、個人的な感覚、その人の現在や育ってきた環境によって違うだろう。それこそ、接してきた他者（両親、家族、あるいは近所の人、学校の人など）がどんな人たちだったかにも影響を受けるはずだ。自分にないものを他者の中に見つけて驚き、そのときの驚きが人生の指針となる人もいれば、自分と同じものを他者の中に見つけて、その共感が嬉しくて、その後の人生で支配的になったとい

う人もいるだろう。どちらが正しくて、どちらが間違っているという話ではない。ただ、自分と違うタイプがいることだけは認識した方が良い。そんな認識ができるのも、あなたが今この本を読んでいるように、知らない人の話を聞いたからなのである。

人と人の出会いは、一人と一人のリンク[注2]だけに留まらない。一人は多数と既につながっているので、ある人と出会えば、その人の知合いにも出会える。友達ができれば、その友達の友達とも友達になれるわけである。これは、本でもまったく同じで、ある本を読むと、その中で語られる別の本のことが気になり、それを手に取る機会が訪れる。⑤特に、気に入った本であればなおさら、それに関連する本が読みたくなる。

小説であれば、同じ作者の作品を続けて読みたくなるだろう。これは、同じ人の別の面を見ているようなものだ。一度会うだけではなく、何度も会える、過去や未来も知りたくなる、といった人の「広がり」を感じることに似ている。

また、小説以外では、同じ作者の本を複数読むことで、たとえ論じていることが変わっても、そこに一貫した思想のようなものが読み取れるだろう。一つの頭脳から出てくる言葉だから当然、同じ知識を基（もと）にし、同じ思考によって展開されている。これは、一人の人と出会い、時間をかけて議論をしたり、いろいろなテーマで語り合うような体験に類似している。

同じ作者ではないリンクもある。文芸作品では滅多にないが、それ以外のものでは、論述の課程で他書を引用することが普通だ（僕は、引用をほとんどしないのだが）。また、関連図書のリストが記されているものも多い（これも僕はほとんどしない）。これらは、その文章が書かれた環境を示しているようなもので、ある人のバック[注3]グラウンドといえる。ある人に出会えば、その人の周囲にどんな人たちがいるのか、と気になるだろう。それと同じだ。そして、そういった人たちにも会ってみようか、と思わせるミリョク[c]がそこにある（ときもあるかもしれない。滅多にないことだが）。

（森　博嗣『読書の価値』）

注1　敬称・・・敬意を込めてつける語。「～様」など。　注2　リンク・・・つながり。

注3　バックグラウンド・・・経歴や生い立ち。

問1 A・B・Cに入る語として最も適当なものを次の中から選んで、その記号をそれぞれ解答欄にマークしなさい。解答番号はAが1、Bが2、Cが3。

ア しかし　イ だから　ウ また　エ つまり　オ やはり

問2 ――線①「動物でいうと、水牛の群れみたいなものかもしれない」とあるが、この表現が意味することとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は4。

ア 社会には予想以上に多くの人がいるということ。
イ 社会の中で考え方が同じ人は群れるということ。
ウ 社会では予想以上に争い事が起こるということ。
エ 社会では様々な人との議論が必要だということ。

問3 ――線②「近頃、友達がいない、仲間に入れない、年老いて一人になった、といった『孤独』が問題視されている」とあるが、この問題に対する筆者の考え方を説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は5。

ア インターネットなどの普及により誰かしらと容易につながれる社会でありそれが当たり前であるからこそ、誰ともつながれなかったり、つながろうとあせったりする人たちが注目されているということ。
イ 他人の言葉を受信することが安易にできてしまう反面、自身の言葉を発信することを難しく感じる人が増え、自身の言葉を聞いてもらえないと感じる人が多くいるということ。
ウ インターネットやSNSでの情報のやりとりのみを人とのつながりととらえている人が多くいるため、そのツールを用いていない人を孤独だと決めつけているだけだということ。

エ　誰とでも容易につながれる現代社会において、誰ともつながらない選択をする人に注目することで、その選択を悪だとする意識をうえつけようとしているということ。

問4　本文前半部分の主題として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は6。

ア　本を読んでいれば孤独にならない
イ　本とは何なのか
ウ　本と人は同じような存在である
エ　本選びの極意

問5　――線③「そういった場合には、二つの方向性が求められている」とあるが、この方向性として適当でないものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は7。

ア　受験勉強を始めようとしたが、何がわからないのかもわからないので参考書を読み込んだ。
イ　コロナ禍で旅行を控えているので、せめて擬似体験をしてみようと観光雑誌を眺めた。
ウ　好きな作家が執筆した恋愛小説の内容をふまえ、主人公になりきって日々の生活を送ってみた。
エ　本を読むということは良いことだと思っているものの、その理由が曖昧（あいまい）なので「読書の価値」を購入した。

問6 ――線④「これ」とあるが、その指示内容として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は8。

ア 作者が自身の知らないことを知るために本を選んでいるということ。
イ 作者が趣味や意見が同じ人と知合いになりたいと思ったことがないこと。
ウ 自分にはないものを持っているということを理由に作者は奥さんと結婚したということ。
エ 自分にはないものを持っている人と知合いになることに価値を置いていること。

問7 ――線⑤「特に、気に入った本であればなおさら、それに関連する本が読みたくなる」とあるが、これを説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は9。

ア 本を読むことでその内容に興味がわいたならば、作者がその結末や考え方に至った経緯についても同じく興味がわいてくるので、本の中で紹介された本にも興味がわいてくるということ。
イ 本を読むことでその内容に興味がわいたならば、それは作者自身に興味がわいたことと同じことなので、同じ作者の異なる作品も知りたくなるということ。
ウ 本を読むことでその作者に興味がわいたならば、たとえ結論や作風が異なる作品であってもそれがその作者に与えた影響を考えながら読めるので、興味深く読めるということ。
エ 本を読むことでその作者に興味がわいたならば、同じ作者の異なる作品でも興味がわいてくるはずなので、本の中で紹介された本は必ず読むべきだということ。

問8　文中から脱落した次の一文を戻す箇所として最も適当なところを文中の（ア）・（イ）・（ウ）・（エ）の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は⑩。

脱落文【若者には、ほとんどのものが未知だからである。】

問9　〰〰線「本というのは、いったい何だろう」とあるが、筆者はこれにどのように答えているか。文中の語を用いて五十字程度で答え、解答欄に記入しなさい。

問10　═══線a・b・cのカタカナは正しい漢字に改め、漢字はその読み方をひらがなにし、それぞれ解答欄に記入しなさい。

二、次の文章は「フィニッシュ・ゲートから」（あさのあつこ）の一節である。主人公である悠斗は中学時代の仲間である湊とともに輪杏第一高等学校陸上部に所属している。ある時、悠斗は同じく中学時代からの友人である絵梨に告白するが絵梨から湊に好意を持っていることを知らされる。本文はがむしゃらにトレーニングに励んでいる悠斗に対して、湊がオーバーワークではないかと指摘する場面である。よく読んで、後の問に答えなさい。

湊に指摘され、自分でも気がついていたがむしゃらな走りを、悠斗は絵梨のせいだと思おうとしていた。絵梨を忘れるためには、本気の恋を吹っ切るためには、走るしかない。だから、おれは走っているのだ。無茶は承知だ。①この想いが落ち着くまで、心が平静を取り戻すまで、走るしかないのだ。Aそう思おうとしていた。

でも、違う。本当は違うのだ。絵梨は関係ない。

焦っているって？　焦っているって、このおれが？

そうだ、おまえは焦っていると悠斗の耳に囁く者がいる。湊ではない。コーチでも監督でもない。悠斗自身の囁きだった。

悠斗は焦っていた。順調に伸びてきた記録がここにきて、［a］動かなくなっていた。いや、むしろ後退している。体調が悪いわけ

ではない。心が乱れてはいたけれど、体調自体は少しも崩れてはいなかった。脚は軽く、フォームにブレはないはずだ。それなのに、b 記録は落ちようとする。必死でがんばって、何とか維持している状態だった。

スランプの経験はある。何度もある。成績が頭打ちになり、伸び悩む。身体の動きがぎこちなくなり、自分本来の走りを見失う。戸惑いもしたし、悩みもした。けれど、そのつど突き抜けてきたのだ。突き抜け、乗り越えれば、以前より力の増した自分がいる。スランプは次のヒヤクに繋がる可能性でもあったのだ。だが、今回は違っていた。まるで手ごたえがない。今までは、目の前に現れた壁だった。乗り越えられる壁だった。どれほど高くても、壁なら越えていける。

今、悠斗には越えるべき壁が感じられなかった。壁ではなく穴だ。道はそこで途切れ、奈落へと消えている。ぽかりと黒い穴が足元に広がっている。踏み出せば、真っ逆さまに落下するだけだ。足が竦む。為す術がつかめない。

どうすればいい。どうしたらいい。

焦っていた。確かに、焦っていた。今の成績は、この地方ではトップレベルではある。しかし、全国となると、すでに突出した数字ではなくなっていた。オリンピック？　笑ってしまう。世界など掠りもしないじゃないか。

もっと伸びなければ。もっと縮めなければ。もっと強くならなければ。もっと走らなければ。

それができるのか。

また己の声が囁く。

おまえに、それができるのか。目の前にあるのは壁ではない、底無しの穴だ。これ以上、前に進めるのか、悠斗。

耳を塞いでも聞こえてくる。

もしかしたら、ここまでなのか。

胸の中を自分への懐疑が過ぎる。ランナーとしてのおれは、ここまでしか行けないのか。

限界。

道は途切れ、それ以上進めない。努力ではどうしようもない、ぎりぎりの境。突破しろと他人は言う。自分の限界を突破するのは自分しかいないのだと、言う。正論だ。けれど、本物の限界を、突破しようとして突破できない限界を人は必ず持っている。壁でなく奈落への穴だ。

悠斗は本能的に察してしまった。

もしかしたら、じゃない。おれは、ここまでなんだ。

ここまでが精一杯だった。これ以上、伸びる可能性はないのだ。早熟の才能が他人より先んじて開いたに過ぎない。②開ききった花は花弁を落とすしかない。

超一流のアスリートとなる者は、飛翔のための羽を持つ。壁も穴も飛び越えるための羽が生えている。

自分の背に何もないことを悠斗は悟ったのだ。

炙(あぶ)られるようだった。絵梨に拒まれたときは、疼(うず)いて止まらなかった胸が、今は［c］炙られている。

そう、絵梨は関係ない。身の内を炙るのは、限界の前で立ち竦む悠斗自身だ。

「悠斗、あのな」

「もういい」

身を翻(ひるがえ)し、湊から遠ざかる。

もういい。何も聞きたくないし、何も言いたくない。

グラウンドの外れにある部室の前で、ふと振り返ってみる。暮れていくグラウンドの片隅で一つの黒い影となりながら、湊はまだ、佇(たたず)んでいた。

悠斗はトレーニングを止めなかった。さらにがむしゃらに走り続けた。［d］疲れてベッドに横たわると、ほんの一時、③炙られる苦痛を忘れることができた。

「あんた、だいじょうぶなの。なんで、そんなに無茶苦茶な練習、せなあかんの」

スポーツ全般にまるで疎(うと)い母親にさえ訝(いぶか)しがられ、心配された。

「おい南野、飛ばし過ぎだぞ」

監督に注意され、コーチ役の教諭から練習メニューの変更を言い渡された翌日、悠斗は足をもつれさせて転倒した。部員全員での軽いランニングの途中だった。先頭を走っていた悠斗が転び、その身体につまずいて、数人の部員が折り重なって悠斗の上に倒れこんだ。

男たちの下敷きになり、息が詰まる。右足に鈍い痛みを感じた。そのまま、コーチの車で病院に運ばれ、右足首の打撲と診断された。

「左もやってますね。親指の付け根。どうやら疲労骨折らしい。うーん、こっちはちょっと長引くかも」

シャーカステン[注2]に並んだレントゲン写真を指差しながら、初老の整形外科医は［e］を顰(ひそ)める。

「疲労骨折、ですか」
「ですね。よくこの状態で走っていたもんだ。慢性的な疼痛(とうつう)があったでしょう」
コーチの［　e　］が医師よりも強く顰められた。
一か月後に迫った県大会、悠斗の出場は当然見送られ、控えの湊が走ることになった。
「運が悪かったな」
「おまえ、がんばり過ぎたんや。今回は休めって天の声やな」
部の仲間たちが口々にナグサめてくれる。[b]④曖昧な笑みを浮かべて、悠斗は「まあな、自業自得やから」と応じた。泣きたいのか笑いたいのかよくわからない。不甲斐(ふがい)ないと自分を責めているのか、仕方ないと諦めているのかも、わからない。感情は混沌(こんとん)として、確かな形にならないのだ。
県大会、輪杏第一高校の成績は全般に振るわず、特に、長距離部門のそれは惨憺(さんたん)たるものとなった。湊は個人的には奮闘し、自己最高の記録を残したが、結果的には八位に過ぎなかったのだ。
悠斗は松葉杖(まつばづえ)をつき、スタンドにいた。スタンドからトラック競技を眺めるのは初めてかもしれない。
湊の走る五千の試合。絵梨の姿を見つけた。スタンドの中ほどに座り、祈るように指を組んでいた。ひたむきな眼差(まなざ)しが、トラックを走る一人の男に注がれる。
悠斗は絵梨からも絵梨の眼差しを受けている男からも目を逸(そ)らす。胸はそれほど疼かなかった。
湊が八番目にゴールする。コーチがタオルと水のボトルを持って駆け寄る。湊は身体を折り曲げたまま、しばらく動かなかった。悠斗も動かぬまま、見詰める。
湊の上体がゆっくりと起き、視線が辺りを巡る。絵梨を捜しているのだと思った。走りきったぞと伝えるために、恋人を捜していると。しかし、湊はスタンドを見ようとはしなかった。汗でしとどに濡[注3]れた顔を空へと向ける。そして、笑った。薄雲を突き抜けて地に降りて来る光が、その顔を照らす。
満足げな、嬉しげな笑顔。
松葉杖が足元に転がった。バランスを崩し、プラスチックのイスに倒れこむ。近くにいた後輩部員が身体を支えてくれた。
「先輩、だいじょうぶですか」

「うん。すまん」

辛うじて答え、軽く手を振って見せた。そのまま、イスに座り込む。タオルを肩にかけ、こちらに背を向けた湊を凝視(c)する。

なんで、あんな笑い方ができるんだ。

八位なのに。平凡な、到底誇れるわけもない成績なのに、あいつ笑いやがった。

⑤胸の奥からじわりと湧いてきたのは、敗北感だった。

あぁ、おれは負けたのだ。とうの昔から、湊に負けていたのだ。おれは湊の半分も走ることが好きではなかった。惨(みじ)めなレースをするぐらいなら、走らない方がマシだと思ってしまった。

混沌とした感情が成形し始める。安堵(あんど)(B)があった。脚にギプスをはめたとき、もうこれで走らないですむ、走らないですむ言い訳ができたと安堵した。

おれは湊の半分も走ることを愛せなかった。

悠斗が陸上部の監督に退部届を出したのは、二週間後。松葉杖無しでも何とか歩けるようになったころだった。

注1　奈落・・・どん底。　注2　シャーカステン・・・発光装置のついたディスプレイ。

注3　しとどに・・・びっしょりしているさま。

問1　[a]・[b]・[c]・[d]に入る語の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は[11]。

	a	b	c	d
ア	じりじりと	ずるずると	めらめらと	ぼろぼろに
イ	ぴたりと	だらだらと	めらめらと	くたくたに
ウ	ぴたりと	ずるずると	じりじりと	くたくたに
エ	じりじりと	だらだらと	じりじりと	ぼろぼろに

問2 ――線①「この想い」とあるが、この指示内容として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は12。

ア 絵梨に選ばれた湊に対する嫉妬。
イ 失恋した絵梨に対する未練。
ウ 湊にやつあたりする自己への嫌悪感。
エ 走ることに対する情熱。

問3 ――線②「開ききった花」とあるが、悠斗のどのような様子を表したものか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は13。

ア 他人よりも早く才能を開花させた様子。
イ 持っている才能をすべて発揮した様子。
ウ 自身の才能を存分に輝かせている様子。
エ 心身の成長がこれまでで最も著しい様子。

問4 ――線③「炙られる苦痛」とあるが、何に対するものか。それを説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は14。

ア 自分では何が悪いのかが全くわからない状態でトレーニングを続けていくしか選択肢がない現実への不満。
イ 絵梨にふられたことが予想以上にショックで、その影響を自分自身でコントロールできない己の未熟さ。
ウ 自分がこれから超えようとしている、これまで経験したものとは全く違う未知のものへの恐怖。
エ 自分の限界を感じ、自身には才能がなかったということを自覚するもそれを受け入れきれないことへの辛さ。

問5 [e]に入る語として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は15。

ア 眉　イ 目　ウ 息　エ 首

問6 ――線④「曖昧な笑みを浮かべて」とあるが、このときの悠斗の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は16。

ア けがが原因でこの県大会に出場できないことには不甲斐なさも感じるが、仮にけがもせずに出場したとしても自分の満足する記録は出せないと感じ、それならば出場しない方が良かったかもしれないとも思っている。

イ チームのためにがむしゃらに練習してきたことが原因でけがをしたにも関わらず、まるで他人事のように自身をなぐさめてくる仲間に苛立ちを持ちつつも、そのがんばりを評価してくれた仲間には感謝もしている。

ウ 自分のけがは、湊や顧問の先生からの制止を聞かずにがむしゃらな練習を続けた自身の責任だと感じているものの、その責任を追及したりせずに自分のことを思いやってくれる仲間にこれまでにない信頼感を寄せている。

エ けががなければ県大会に出場したいと思ってはいたものの、自分のけがは勝つための練習の中で起こったことなので、仕方がないことなのだと必死に自分自身を納得させようとしている。

問7 ――線⑤「胸の奥からじわりと湧いてきたのは、敗北感だった」とあるが、悠斗は湊にどのような点で敗北したと感じたのか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は17。

ア 全てが自分の思い通りにならない苛立ちをごまかすために走っていた自身に対して、湊は結果よりも何よりも自分が走ることに対して喜びを抱いていた点。

イ 県大会で良い成績を残して絵梨を喜ばせるために走っていた自身に対して、湊は絵梨のことなど一切気にせず大会に出場できなかった自分のために走っていた点。

ウ 絵梨との失恋の痛手を紛らわすために走っていた自身に対して、湊は自分自身の感情を一切出さずにひたむきに走っていた点。

エ 負けるくらいなら走らないほうが良いと考えていた自身に対して、湊はがむしゃらに走れば必ず結果はついてくるということを信じて走っている点。

問8 〰〰線A「そう思おうとしていた」とあるが、実際に悠斗ががむしゃらに走っているのはなぜか。文中の語を用いて、解答欄に記入しなさい。

問9 〰〰線B「安堵」とあるが、どのような安心感か。文中の語を用いて、二十字程度で答え、解答欄に記入しなさい。

問10 ═══線a・b・cのカタカナは正しい漢字に改め、漢字はその読み方をひらがなにし、それぞれ解答欄に記入しなさい。

三、次の文章を読んで後の問に答えなさい。設問の都合上、表記を改めた箇所がある。

昔、賈氏（かし）といふ人、たぐひなく、①かたちわろくて、顔うつくしき妻をなん持ちたり[A]。この女、かばかり醜き人とも知らず、あ[注1]ひそめにければ、くやしきこと取り返すばかりにおぼえけれど、②いふかひなくて明かし暮らすに、よきこと悪しきこと、すべてもの言はず、えも笑はで、世の常はむすぼほれ[注2]てのみ過ぐしけるを、男、「たぐひなく憂し」と思ひて、③この女にもの言はせ、うち笑ませばやとしけれども、いかにもかひなくて、三年（みとせ）にもなりにけるに、春、野辺に出でて、もろともに遊び侍（はべ）りけり[注3]。きぎすといふ鳥の、沢のほとりに立ちゐ侍りけるを、④この夫、弓矢を取りて名を得たりければ、このきぎすを立ち所に射殺（いころ）してけり。これを見るに、年ごろ[注4]のにくさも忘れて、褒（ほ）め、うち笑みたりければ、⑤夫うれしさたぐひなくおぼえて、

聞かましやいもが三年の言（こと）の葉（は）を野沢の[B]えざらましかば[注5]

これを聞くにこそ、よろづのことよくせまほしけれ。

注1　あひそめにければ・・・結婚したので。　注2　むすぼほれて・・・気がふさいで。
注3　もろともに・・・夫が妻といっしょに。　注4　年ごろ・・・数年。　注5　いも・・・あなた。

問1　――線①「かたち」とあるが、文中の意味として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。
解答番号は[18]。

ア　容姿　　イ　様子　　ウ　性格　　エ　雰囲気

問2 A に入る語として適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は19。

ア けら　　イ けり　　ウ ける　　エ けれ

問3 ――線②「いふかひなくて明かし暮らすに」とあるが、この主語として適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は20。

ア 賈氏　　イ 妻　　ウ きぎす　　エ 筆者

問4 ――線③「この女にもの言はせ、うち笑ませばや」とあるが、この現代語訳として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は21。

ア この女にしゃべらせて、ほほえませたい。
イ この女に謝らせて、気持ちを晴らしたい。
ウ この女にしゃべらせて、皆を笑わせたい。
エ この女に謝らせて、皆の笑い者にしたい。

問5 ――線④「この夫、弓矢を取りて名を得たりければ」とあるが、この現代語訳として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は22。

ア　この夫は、弓矢という字から自分の名前をつけてもらったので、
イ　この夫は、弓矢の腕がすばらしいということで名声を得たので、
ウ　この夫は、他人の弓矢を取り上げて自分のものとしたので、
エ　この夫は、弓矢を手に取ってきぎすを得たので、

問6 ――線⑤「夫うれしさたぐひなくおぼえて」とあるが、この理由として最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は23。

ア　妻が自分への憎しみを忘れてくれたから。
イ　妻が自分をほめてほほえんでくれたから。
ウ　きぎすをすぐさま射ることができたから。
エ　自分は弓矢の達人であることが確信できたから。

問7 本文の出典である「唐物語」は中国の故事に和歌を加えてまとめた説話集である。日本において和歌が流行したのはいつごろか。最も適当なものを次の中から選んで、その記号を解答欄にマークしなさい。解答番号は24。

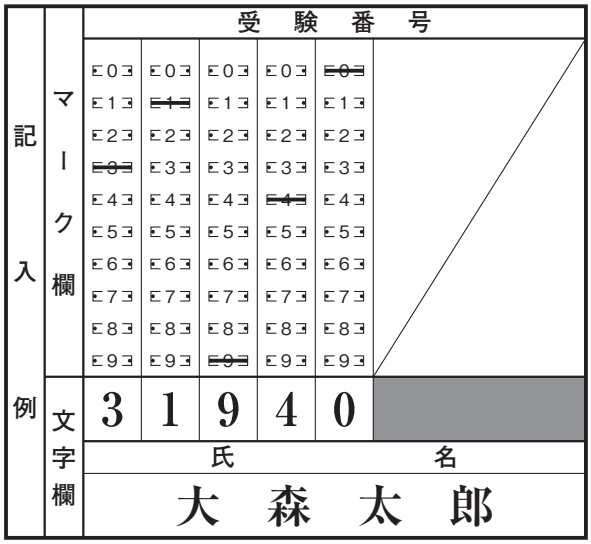
ア　奈良時代　　イ　平安時代　　ウ　鎌倉時代　　エ　江戸時代

問8 B に入る三字の語を文中より探し出し、解答欄に記入しなさい。

解答用紙記入上の注意

記入上の注意

1. この用紙は、コンピュータが直接読み取りますから汚したり、折り曲げたりしないで下さい。
2. 記入は HB 以上の濃い鉛筆を使って下さい。
3. 間違いは消しゴムで完全に消して下さい。
4. マークは ⊏ ⊐ の枠内に正しく引き、はみだしたりしないで下さい。ぬりつぶす必要はありません。
5. この用紙を誤って破ったり、汚したり、折り曲げたりしたときは、監督の先生から新しい用紙をもらって下さい。
6. 受験番号、氏名の記入方法
   右の記入例をよく見て正しく記入して下さい。
   記入例は３１９４０の場合です。



解答欄の記入の仕方

1. 問題は一から三までで１ページから 17 ページにわたって印刷してあります。
2. 問題によって解答群は（ア）から（エ）まで、あるいは（ア）から（オ）までなどさまざまですが、答えは１つしかありません。
3. 各問題の答えは解答用紙に明確にマークしなさい。
4. 問題をよく読んで、解答群の中から、正しいと思う答えの記号を選びます。
   例　次の熟語の読み方の正しい解答を選びなさい。
   会 得（ア．エトク　　イ．アイトク　　ウ．カイトク）

解答番号	文字欄	解答マーク欄									
記入例	（ア）	~~ア~~	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
1	（　）	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
2	（　）	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
3	（　）	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ
4	（　）	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ

正しい答えは「ア」ですから、文字欄に（ア）と記入し、
「解答マーク欄」に線をひきます。

5. 解答用紙と問題用紙は別々に提出しなさい。
6. 試験時間は 50 分です。
7. 合図があるまで開かないで下さい。